2017 年 7-12 月

20170702
昨日は、ソビエト史研究会年次研究大会（専修大学向ヶ丘サテライト）があった。この会は私と同世代の人たちがまだ若かった 1970 年代末に、若さの勢いで始めたものだが、われわれの高齢化とともに尻すぼみになっていたのを、２、３世代も若い人たちが、新しい構想の下に活動を再開させている。ありがたいことだ。一日のうちの 3 つのセッション、あわせて 10 本近い報告で、充実した会だった。
午前中は音楽に関する英語セッション。Z. Wojnowski（ウクライナのポップ音楽）と神竹喜恵子（フリードのオペラ『アンネの日記』）。音楽史を社会史的文脈において論じる議論は近年徐々に盛んになりつつあるが、ソ連史でもそれが可能だということを示す面白い試みだった。
午後の第一セッションは市川浩編『科学の参謀本部』（北海道大学出版会）の合評会。科学史プロパーから小山俊士、ソ連史の側から立石洋子という二つの書評報告に対し、執筆者側から市川浩、金山浩司、斎藤宏文、藤岡毅の 4 氏が応答した。科学史というジャンルは科学自体に通じていないものには取っつきにくいところがあるが、歴史学の一部として十分対話可能だという感触を得ることができた。付随的な説明の中で、ルィセンコ学説と関係してエピジェネティクスという新しい学問分野について、専門的でありながら分かりやすい解説を聞くことができたのは思わぬ収穫。
午後の第 2 セッションは、4 つのディシプリンからするソヴェト史への新しいアプローチ。社会言語学から荒井幸康、宗教史から高橋沙奈美、国際政治経済の観点から藤沢潤、比較政治学から溝口修平という豪華な取り合わせ。若手・中堅からの新しい問題提起に対し、会場からも（私自身を含めて）多数のコメントや質問が相次ぎ、活気ある討論となった。午前中はやや人数が少なかったが、午後になって人数が増え、これまで知らなかった若手も参加して、新しい研究状況が生まれつつあることを感じとることができた。研究会後の懇親会も盛会だった。

20170706
浅野豊美・小倉紀蔵・西成彦編『対話のために――「帝国の慰安婦」という問いをひらく』クレイン、2017 年。
副題に示されているように、朴裕河の著書『帝国の慰安婦』が韓国で騒然たる論争の真っただ中にあるという情勢を注視しながら、日本で編まれた論文集である。私はこのテーマ自体について深い知識を持っているわけではないが、見過ごすことのできない深刻な問題だとかねて感じていたので、こういう本が出たと知ってすぐに買って読んだ。
本書は統一的な結論で結ばれているわけではなく、多様な観点を持つ編著者たちが、とにかく対話を――日本と韓国の間でも、またそれぞれの国の中でも――かわすための前提条件をつくることを目指した書物であるように見える。しかし、本書まえがきでも触れられている集会「慰安婦問題にどう向かい合うか」（2016 年 3 月 28 日）の記録をインターネットで見ると、その集会に参加した人たちの間でも共通点を見出すことができず、本書に

はそのうちのある部分の人たちは参加していないようだ。集会参加者たちは、少なくとも日本の植民地支配や従軍慰安婦制度を非人道的なものと見なし、右派ナショナリストと一線を画すという限りでは大まかな一致があるはずだが、それでも共通の土俵をつくることができないということは、この問題がいかにセンシティヴであるかを物語る。
本書には、多様なバックグラウンドを持つ 15 人の筆者がそれぞれに個性的な論考を寄せている。一つ一つについて論評する余裕はないが、浅野豊美の巻頭論文は、この厄介な問題がどのような意味で厄介なのかを丁寧に解きほぐしている。外村大の論考はこの主題が歴史研究にとってもつ意味を考究して、示唆するところが大きい。中山大将の「なぜ〈数〉を問うのか」は、犠牲者（被害者）の数をめぐる論争のもつ意味を論じているが、これはスターリン体制の犠牲の規模をめぐる論争という、私が長らく取り組んできた問題とも響き合うものがある。また巻末におかれている金哲の論文は哲学的な省察として深いものを感じさせられた。
それ以外にも興味深い論考が多いが、中でも私の目を引いたのは、直接に慰安婦問題を扱っているわけではない比較文学研究者の西成彦の論文である。これはある文学作品をとりあげて、それに独自の読解を施すことで、これまでになかった新しい視界を開くという感じの作品だが、芥川龍之介の有名な『藪の中』をこのように読むことができるという読解には、思わず息をのんだ。
日本と韓国の間に存在する痛ましい過去をめぐる議論がなかなか和解と対話に行き着かないという状況は、ロシアとバルト諸国・ポーランド・ウクライナなどとの間の歴史論争がなかなか和解と対話に行き着かない状況と似たところがある。すぐに解決をもたらすというわけにはいかないにもせよ、その両方を視野に入れて議論を積み重ねていかなくてはならないのではないかと感じる。

20170722
昨日は早稲田大学で、浅野豊美・小倉紀蔵・西成彦編『対話のために――「帝国の慰安婦」という問いをひらく』の公開書評会に出席してきた。私は本書それ自体に関しては純然たる部外者だが、「歴史をめぐる政治」という観点から強い関心をいだいてきた。初対面の朴裕河さんに拙著『民族とネイション』韓国語版を贈呈することができたのは幸いだった。編者たちのうち、浅野氏とはある程度旧知の仲だが、西氏とは初対面。討論では、和田春樹、上野千鶴子ほか多くの人たちがそれぞれに個性的な発言を行ない、いわゆる仲間ぼめの会にならなかったのは、「対話のために」という目標に照らしてよいことだったと言えるだろう。痛ましい過去をめぐる和解と対話の困難性という問題はロシアとポーランドやバルト三国の関係などにも通じるものがあり、どこかに決定的な解決があるというものではないが、考え続けるべき問題だと感じた。

20170817
大分以前にいただいていながら永らく「積ん読」にしていた稲葉振一郎『政治の理論――リベラルな共和主義のために』（中公叢書、2017 年）をようやく読んだ。
「非政治学的な政治学者」たる私の読み方はかなり癖のあるもので、外在的になるおそれがあるが、敢えて大雑把にいうなら、同じ著者の前著『「公共性」論』（ＮＴＴ出版、2008

年）と本書に共通するテーマは「公共性」という概念およびそれを重視する政治思想たる「共和主義」といってよいのではないかと思われる。このテーマは、その重要性は感じるものの、私にとってなかなか呑み込みにくいものの残る主題である。その最たる要因を単純にいってしまうと、公共の事柄を主体的に担う対等の人々（市民＝公民）の理性的なコミュニケーションを通して成り立つ営為（アーレント的意味での「政治」）を重視するのはよいとして、そのような主体たりうる人間というのは、財産・教養・能力・「徳」などを備えた少数者だけであり、当該社会の大多数の人はそこから除外されざるをえないのではないかという疑問である。
もちろん稲葉はこの疑問に自覚的であり、それどころか本書全体がその問いへの回答の模索をなしているように見える。その際、重要な位置を与えられているのがアーレント、フーコー、木庭顕といった論者の著作の独自の読解である。これらの人たちの著作はどれもかなり複雑かつ難解なところがあるが、稲葉の読解はユニークかつ啓発的であり、かなりの程度まで納得させられる。だが、それでもって先の疑問が解消するかといえば、そこにまでは至らないのではないかとの疑念がどうしても残る。少数の特権者だけでなく「万人に開かれた公共圏」（250 頁）――それは「無産者を有産者にすること」を要する（224-225 頁）――というのが「リベラルな共和主義」のイメージのようだが、そんなものがどのようにして可能なのかという疑問をどうしてもいだいてしまう。
著者自身、そのことを意識しているようであり、「その〔リベラルな共和主義の〕実現可能性、持続可能性についてはほとんど何も論じてはいない」と断わっている（252 頁）のだから、これは無い物ねだりなのだろう。回答を出したかどうかよりも、考えるべき課題を提起してくれたという点で著者に感謝しなくてはならない。

20170908
田川建三の『新約聖書　訳と註』が完結したようだ（全 7 巻 8 冊、作品社、2007-17 年）。私は聖書学に通じているわけではなく、このシリーズについても、たまに書店広告を見て「ああ、またもう一巻出たようだな」という関心を払う程度だったが、長い年月をかけて完結したことには感慨を覚える。田川という人について、それほどよく知っているわけではないが、初期の著作『イエスという男』は刺激的な作品で、興味深く読んだ（それ以外にも 2、3 冊の本を読んだことがある）。若い時期に国際基督教大学講師を解雇された後、さまざまな経歴を経て、60 代も終わり近くになってから、このライフワークの執筆に専念するようになったようだが、こつこつと作業を続けて遂に完結に至ったのは偉業だと感じる。全巻読破とまではいかないまでも、せめて今回出た最終巻の『ヨハネの黙示録』は読んでみたい。

201709016
Russian Review の最新号（vol. 76, no. 4, October 2017）に、R. Service, *The End of the Cold War, 1985-1991,* Macmillan, 2015 の書評が載っていた。
サーヴィスのこの書物を期待をもって読み始めると、次第にフラストレーションが募り、がっかりさせられるという書き出しに始まり、むやみやたらと事実誤認が多いとか、当てにならない少数の二次文献を丸呑みにして書かれた個所があるなど、さんざんだ。もっと

も、重要な大テーマに正面から取り組んだ本だとか、怪しげだったり陳腐だったりする言明と並んで新規な見解もあるといったことも述べられていて、かろうじて全面否定は免れているが、全体として相当辛口な書評。
ロバート・サーヴィスという人は、日本でも『レーニン』（上・下、岩波書店、2002 年）、『ロシア革命』（岩波書店、2005 年）、『情報戦のロシア革命』（白水社、2012 年）、『トロツキー』（上・下、白水社、2013 年）など多数の訳書が出ていて、相当知名度が高い（ある訳書のカバーには、「世界的に高い評価を受けている、ロシア研究の第一人者」とある）。いろんな大テーマを取り上げて、次々と概説的な書物を書くのが得意なようだが、その分、仕事が粗くなってしまうのかもしれない（あるいは、これまでの作品ではソ連時代初期を主に取り上げていたのに、急にソ連末期に取り組んで、無理が出たのか）。
こういう書評を読むと、その本自体を読もうという意欲が失せてしまうが、何といっても非常に重要なテーマについて、知名度の高い歴史家が書いたものである以上（おそらくかなり広く読まれて、影響力も大きいことだろう）、この書評がどこまで当たっているのかの検証を含めて、自分の目で読んでみないわけにはいかない。読んでみて「意外に面白かった」ということになればよいのだが、この書評通りの感想になってしまったら悲惨だ。多少なりとも前者の側面があることを祈っておこう。

20170920
下條信輔『ブラックボックス化する現代――変容する潜在認知』（日本評論社、2017 年）という本を読んだ。
この著者の作品は大分以前に、『〈意識〉とは何だろうか』という本（講談社現代新書、1999 年）を読んだことがあり、畑違いながら、なかなか面白かったので、それ以来、名前が頭に残っていた。もっとも、下條の専攻（認知神経科学・知覚心理学）は専門性が高く、それ自体を読み解くのは分野外の人間にとってはハードルが高いが、今回の著書は時事評論的要素を含んだエッセイ集であるため、専門に通じていない読者にも読みやすいものになっている。まえがきにあるように、現代社会の特徴として、①近視眼化、②健忘症化、③ブラックボックス化、④情報実体化を挙げ（この四者は相互に密接な関係にあるという）、その具体的あらわれを、原発事故、各種データ偽装事件、佐村河内事件、小保方事件、ロボットとＡＩの飛躍的進化、大学改革等々、多彩な話題とからめて論じている。
「ブラックボックス化」という傾向は、コンピューター（に限られはしないが、それに顕著に代表される）技術の発達および社会的普及に随伴するところがあるような気がする。本書よりも 30 年も前の本だが、佐伯胖『コンピュータと教育』（岩波新書、1986 年）という本を読んだときに、私も「ブラックボックス」という問題について思いをめぐらし、自分なりに考えてみようと試みたことがある（塩川伸明ホームページの「研究ノート」の欄に収録）。もちろん、当時と今とでは、ＩＴ技術（やその他の関連技術）の飛躍的発展と普及は格段に違っており、その社会的影響も大きく広がっていることを感じさせられた。
今回の下條著は短いエッセイを集めたものなので、読みやすい代わりに、やや食い足りない印象を残す面もなくはない。また、全体として「ブラックボックス化」という趨勢に批判的であると同時に、それを単純に道徳主義的に非難しても始まらないというスタンスの

ようで、それはその通りだと思うが、「じゃあ、どうしたらいいんだ」という疑問も残る。いずれにせよ、いろんなことを考えさせる刺激的な本だった。

20170930
ペレストロイカに関する新刊書 4 点（英語が 1 つとロシア語が 3 つ。いずれも 2017 年刊。どれも到着したばかりで、中身をきちんと確認したわけではないが、とりあえずの第一印象）。
① William Taubman, Gorbachev: His Life and Times.
850 頁という分量は、通常の書物としてはものすごく分厚い部類に入るだろうが、対象の大きさを考えると、これでもまだ足りないのではないかという気がする。とりあえず文献目録を見ると、ゴルバチョフ本人をはじめとする多数のインタヴューを活用しているほか、いくつかのアルヒーフにも当たっているのが目を引くが、ルガスピが挙がっていないのが不審。また公刊文献は意外に少数しか挙げられていない。とはいえ、テーマの大きさを考えれば、無い物ねだりをしても仕方ない。これまでゴルバチョフ論の「定番」的位置を占めてきたアーチー・ブラウンを引き継いで、「第 2 の定番」的なものになるのではないか。ここから引き出せるものを最大限引き出した上で、更にその先に進まなければならない。
②ゴルバチョフ著作集第 27 巻。
この巻は 1991 年 7-8 月（つまり、あの 8 月クーデタの時期）をカバーしている。ざっと目次を見たところ、これまで未公表だった文章も結構含まれているようだ。これまでの巻同様、付録や注もかなりの頁数を占めていて、丁寧な編集ぶりが窺える。他の角度からする記録とつきあわせてみなくてはならないのはもちろんだが、とにかく最重要資料であることは間違いない。この著作集はあと 2、3 巻で 1991 年末のソ連解体とゴルバチョフの大統領辞任にまでたどり着くだろう。
③コマロフ、マトヴェーエフ『ソ連解体および新ロシア形成の体系的日誌（1983-2014）』。
何年何月何日にどういうことが起きたかということの確認は、歴史研究にとっては一種の予備作業ないし素材確保として欠くことができない。もちろん、日誌が「客観的」とは限らず、どういう事項をどのように取り上げるかに編者の立場が反映されるのは当然だが、そういう点に気をつけながら使えば、とにかく有用な道具たりうるもののように思える。
④マノフ＝ユヴェンスキー『ペレストロイカ：裏切りか？挑発か？誤りか？それとも不可避性か？：誰のせいか？何をなすべきか？』。
おどろおどろしいタイトルだが、この主題がいまでもロシアの人々の胸を騒がすものであることを物語っているのだろう（「誰のせいか」「何をなすべきか」というのは、何らかの重要な出来事をめぐってロシア人が言い争うときに使う決まり文句）。研究書というよりも一種の政治評論のようだが、そういうものとして現代ロシアのある種のメンタリティを表出しているのかもしれない。
このように並べると、いまや四半世紀以上前の出来事となったペレストロイカおよびソ連解体がようやく歴史研究の対象となり始めていること、と同時に、今なお十分な距離をとって冷静に観察するのは難しく、各論者ともそれぞれの現代的思いやバイアスをもって対象に臨んでいることが感じられる。現代史の難しさと面白さを改めて感じる。

20171004
いただきもの。
川崎修・萩原能久・出岡直也編『アーレントと二〇世紀の経験』慶応義塾大学出版会、2017年。
本書のもととなった慶応大学でのシンポジウム（2015 年 3 月）については、主催者の一人である出岡直也氏から話を聞いて知っていたが、種々の理由で私は出席しなかった。私のアーレント観はかなりアンビヴァレントなもので、「どうも馴染めない」という感覚と「それでもどこか気になる」という感覚の両面がある。彼女の著作の熱心な読者とはいえないが、長い間にぽつりぽつりといろんなものを読み、反撥・共感・疑問の入り混じった曰く言い難い感想をいだいてきた。そういう経験を積み重ねているうち、一方ではバーリンのアーレント評が手厳しいことを知り、他方では川崎修氏のアーレント論が私の考えとわりと近いことに励まされたりして、はじめてアーレントについて書いたのは、『民族浄化・人道的介入・新しい冷戦』（有志舎、2011 年）の第 8 章「ジェノサイドとハンナ・アーレント――『イェルサレムのアイヒマン』をめぐって」である。最近では、稲葉振一郎氏の『政治の理論――リベラルな共和主義のために』の感想を FB に書き込んだとき（20170817）、アーレントにも一言触れてみた。
そういった経緯があったので、この本が出たと知ったとき、そこからどのように摂取したり対話したりすることができるだろうかということが気になった。執筆者の一人である松本礼二氏からは、アーレントのフランス革命論を批判的に検討した章のコピーをいただき、これは大変面白かったので、他の章がどうなっているかに関心が引かれ、本を近々買おうと思うに至った。ちょうどそういうところへ、ありがたいことに、伊東孝之氏から論集全体の恵贈を受けた。おそらく伊東氏と私とでは考え方がかなり食い違っているだろうが、それでも何とかして生産的な論争ができればよいがと期待する。
（付記）現在執筆中のある小文では、アーレントの『革命について』にちょっとだけ触れる予定。

20171105
最近のニュースから。
ロシア大統領府の第一副長官が「プロテスタントはロシアの伝統的宗教の一つであり、ロシア社会で重要な役割を果たしている」と発言したとのこと。一瞬驚かされる発言だが、考えようによっては、突然の新見解ではないとの見方もありうる。というのも、1997 年の宗教法制定に際し、当初の文案では「正教、イスラーム、ユダヤ教、仏教」の 4 つが伝統的宗教として挙げられていたのが欧米諸国から強い批判を受け、「正教」という文言を「キリスト教」に置き換える修正が施されたという経緯がある。この修正によって、少なくとも法文上は、カトリックやプロテスタントも「ロシアの伝統的宗教」の一つに含まれることとなった（但し、それとは別に「正教の特別の役割」に言及することで、正教は別格扱いされている）。数年前に話題となった「非伝統的性行動」（同性愛のこと）宣伝規制法やプッシー・ライオット事件などについても、「キリスト教道徳」を守るという言辞を用いて西方キリスト教の一部（道徳主義的右派）にアピールする試みがなされた。今回のプロテスタント発言は、宗教改革 500 周年を機に世界中で宗教改革への注目が高まって

いる中で「わが国だってプロテスタントを尊重しているのですよ」と（とりわけドイツに）アピールする思惑があるのだろう。そうした政治的思惑はそれとして押さえておく必要があるが、ともかく政権がそういう形でのアピールを必要と考えたのは何を意味するのか、関心がもたれる。
もう一つ眼を引いたのは、この発言をした大統領府第一副長官とはセルゲイ・キリエンコだったということ。彼はかつてエリツィン時代に短期間首相をつとめたことがあり、その後しばらく「リベラル派」の代表格と目されていた。ある時期に政権に取り込まれたことまでは知っていたが、こんな地位についていたとは知らなかった。
なお、私はこのところ歴史研究に集中していて現状をきちんとフォローしていないので、ここに書いたことには思わぬ不正確さや不十分性が含まれるおそれがある。事情に通じた方々からの補正を期待したい。

20171204
今年の流行語大賞のトップテンのなかに「フェイクニュース」が入った。この言葉自体については多くの人によって語り尽くされている。だが、それとは別に（もちろん無関係ではないのだが）もう一つの問題があるのではないかという気がしてきた。
世の中には、正しいとか間違っているということをにわかに定めがたい複雑かつ微妙な論争的問題というものが多数存在する。まともな言論活動に携わる人にとって、そうした複雑な問題をどう解きほぐすかが重要な課題だということはいうまでもない。ところが、「フェイクニュース」という言葉が流行語になったのをうけて、そうした論争問題に関して自分が賛同できない意見に「フェイク」というレッテルを当てはめる傾向が一部に出てきたように感じる。こうしたレッテル貼りは問答無用的な論法であり、冷静な議論を封じ込める効果を持つ。
とりたてて複雑だったり微妙だったりするわけではない単純なファクトに関する純然たるでっち上げ――これがフェイクニュースだろう――をある種の人たちが広め、ある範囲でまかり通っているのが寒心に堪えないのはいうまでもない。だが、そうしたこととは別の次元であるはずの事柄についてこの言葉がレッテルとして使用されるのは、言葉の無意味化を更に推し進めてしまうことになるのではないだろうか。

20171210
50 年前の出来事に関する語り方。
1968 年前後の時期の出来事に関する 50 周年企画の類がいくつかの形で行なわれている。その一つの例として、国立歴史民俗博物館における企画展示「『1968 年』: 無数の問いへの噴出の時代」という催しがあった（展示期間 10 月 11 日 - 12 月 10 日）。この展示は相当多くの人を集めたらしく、FB 上でも何人かの人が感想を書いている。
It 氏の場合（12 月 6 日の FB）、われわれよりも相当上の世代であり、当時はドイツ留学中だったのでおそらく何の関係もなかったのだろうと想像していたのだが、実は意外な接点があったようだ。もっとも、その接点が本格的なものとなるかもしれない前夜にドイツに旅立ち、その後は遠くから観察することになったので、個人的な思い出はないとのこと。いってみれば、当事者そのものではないが当事者にやや近い位置にあったということだろ

うか。
まさしく当事者の一人であるT氏の書き込み（12月3日のFB）は、いかにも同氏らしく、過去にきちんと向かい合って、その「総括」を踏まえて前に向かおうという前向きで健全な発想の窺える文章になっている。こういう真っ当な発想にいちゃもんを付けるのは、こちらの側の不健全さをさらけ出すことになり、甚だ気の引けることだが、誰もがあらゆる問題について常に健全でいられるわけではないというようなことをふと考えてしまう。Is氏がT氏のFBに書き込んだコメントは短文で、趣旨を読み取りにくいが、「健全すぎる」発想への感覚的反撥の表出のように読める。こういう感覚は理解できる人とできない人とがいるだろうが、私にはある程度近いところがあるのかもしれない。
さて、私自身についていうと、たまたまT氏と同じ日にこの企画展示を見に行き、博物館でばったりと出会った。しかし、感想をどう書き表わしてよいか考えあぐね、自分のFBには何も書かなかった。過去の出来事の当事者がそのことにどういう思いを抱き、どのように記憶（あるいは忘却）し、それをどう語る（あるいは語らない）かは千差万別である。大声で明快に語る人もいれば、忘却や沈黙を選ぶ人もいる。私の場合、大声で語る気にはなれないが、忘却したり完全に沈黙したりすることにも違和感があり、口ごもりながら、小声でときおり語るというのが似合っているようだ。
こういうことを考えているうちに、これを押し広げていうなら、「過去の出来事に関する当事者たちの語り方の多様性」という問題に一般化できるのではないかという気がしてきた。先にも書いたように、過去の出来事の当事者の記憶や語り方は多種多様である。後世の歴史家に正確な情報を提供するつもりで、できるだけ「客観的」であろうと努めつつ詳細に語る人もいれば、思い切って主観的な感想を語る人もおり、何も語りたくないという人もいる、その他その他。とにかく何らかの形で語られたものが保存されるなら、それは後代の歴史家にとって利用可能な史料となる。だが、語られなかった記憶については、ただ想像することしかできない。歴史家は実在する史料を手がかりとして（もちろん史料批判を施しつつ）仕事を進めるもので、実在しない「仮想の史料」に依拠して書くことは許されない以上、「語られざる記憶」は歴史家の扱える対象の範囲外にある。これはある意味で言わずもがなのことだが、利用できる史料の背後に膨大な「語られざる記憶」があるかもしれないと想像してみることは、歴史家の感性を豊かにする上でなにがしかの有意味性を持つかもしれない。